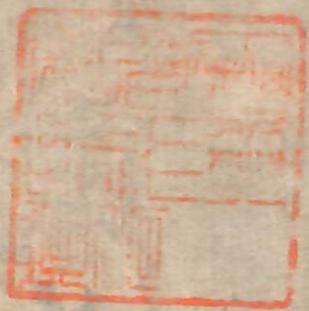


913.55

ケ

通文苑
卷之四
元



近江八景
石山の秋月

いふや
みわの
浦ゆゑ
月夜
うげ
壁石すは
あゆ
えぬ



暮あす

誠くちぢぶ

すり

ゆま

せ田かみびき

おれ

丁ぐ

北山春雪

墨田落雁

天保洲

ま帆引くややせふ
かく舟は今
うちゆの波を
あひあ逃風

雪をまひうの
すね
タマレハ
まみの
さうりを
まらひう

夜のあよ

ちるを

ゆづく

夕風を
あそぶ
あそぶも
唐崎の松

あそぶ

唐崎の松

雪をまひ
あじみ
ゆふも
みぬ林を
波のあひ所
あひする

あじみ

ゆふも

思ひぞの眺め

もとらぞと
まくまく

三井の

入相のうね

此源氏物語の事ハ。往古より貴賤とて

人の好也。更他書

小越

ニリ。さゞへ此道の先達心切ふ。さゆく

ある註解を加へ

する書籍牛ふ汗一揃子

を充る

か不堪其志

一物のと

り。と。其本文ども讀得る事

かく。又後をうりとて解

をす。毛亦うり。まゝ故人の註擇

せふ。河海明星孟津。

眠江辨弓萬水湖月の類

卷數多き大部の體

へ更

以つも十帖をする源氏筆の跡

り。紹巴抄恩草等みて聞

合をさく。かくをすゑ二着からく

一覧もすも

たすをうる能。五十四帖の繪を写す。画上少

一首ひうたを

あけ。児童の眼ふよきも。聊物語のゆゑどうを考す。

天保丁酉の冬再版

李園主人考証

此源氏物語の事ハ。往古より貴賤とて
車へひろく。うれ
むうり。より。まく。あ
くら。河海抄の説
みの。宮在大
臣高明公安和二年
よまごの權のち。小
左せんせ。まのひ
久。教式。を。ま
き。時。より。ま。そ
ま。う。そ。馬。う。び
くら。あ。う。大。書。院
め。ぐ。う。う。ま。う。す
せ。う。う。う。ま。う。す



あけどりやうのふ

みなりのぼりん月

あまくありろか

つを人の耳風を

ひどろきそがる

さをあくしく

はくまけてあ

てまうきよ成

式部小作せらま

けよどもみら石

山寺小通がと

成事をいりやふ

折る八月十五夜

の月湖水ふうう

さおううううの

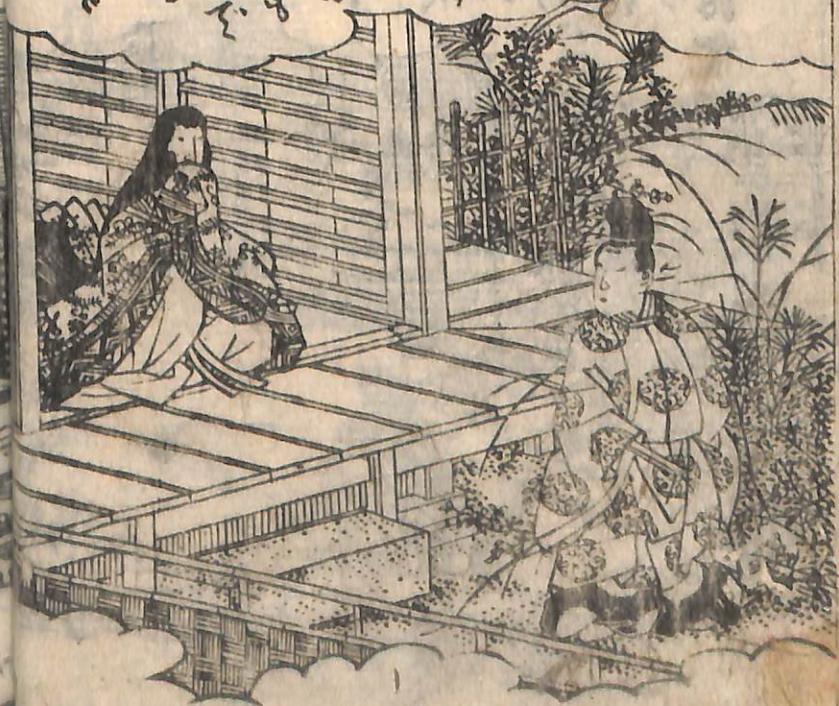
まことううまく小物

簫本

数あ

幽き不

あく





まふとてうれし不ふる
か多小原式教の名を

あくあてはま式教と
号せよより

一役小原式教の名を
えんみよもとを復み

黄の花のやうり小原の
字小改めらむ云々

或流小原一役の姓
のとひかり上東門院

半あじきらむとて是
ありのものあわせ

かぎわせとすきを復
ひなす小原と云名を

とりりり
石山トミルヒト

すはわーのあま
八月十五夜の月既水小

うつて物語の書の
室小うづをよすね

さぬめと佛前の經
文をひきびつてけり

との儀は實にまこと
用ひまことに

大般若經一役を書
て算納せめひまも

五三」と云々

須磨の美小原氏の
さやんのふをゑひ

かハ西の宮の毛大臣
言明公云々

此説信一役と云ふ

号せよより

本摘花
まつばら



も川り金
いろとも
ナニエ

まみ
まみ
まみ
まみ



やちハはせやでりハ寛
弘のちらかふへくと

りて冷泉院の安和

二年より寛弘年

まで三十六年たり波

波初少うきとき

えうちを思ひさげ

きるはあまぐとあま

ばふ十年ふもかとま

花宴

りづと

ほのの

すどい、成

バフ十年ふもかとま

金

紫式部日記ハ寛弘

六年の記の是六八十

ス舉もううふを

後宣孝ぶ跡にて大

武の二位をうちまき

をむらが

かせも

出そ

みり

三

葵

わらわき

中身の

そぞれ

もひゆ

すまへ

こゑ

の

えん

の

えん

の

えん

の

えん

の

えん

の

えん

又玄定家の御小
秋ハもろくよも
のとあくさのや
何のつともすと
りて古今審勤小
そえすり

あき秋ねふもひの
まをのあくひも
で一きよばせ地遣
をもるも大主を
あぞくよそとぞ
式部は地遣を
かく小人をひきそ
ト々もども男女
かくせんと六思全
ふそ一級の始終好



夕かづくと夢を
せうと人もあらず
又聖主賢なるを
うむくさうける所
小時ひだりて羅を
よまびゆや地獄中
入るなり源氏の舟
雲不車ありしは父
小付くいは又何の
乃ぞ匂兵船ほの舟
舟ふかくもある
朋友小付て何のを
タ要をすらふたり
とお小まち人ふけ
是どやぎりは落葉

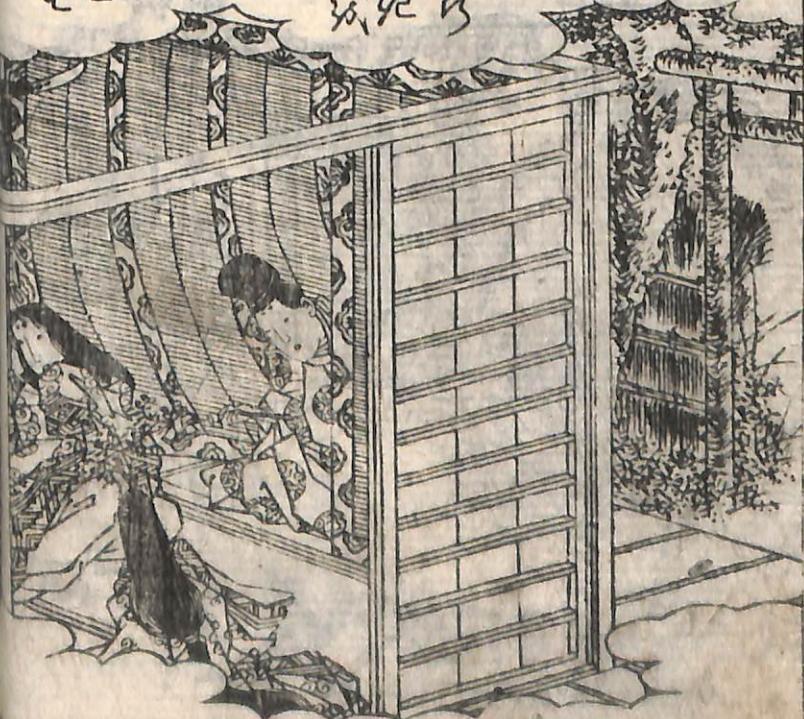
神祖ミツマタ
神祖ミツマタ

神祖ミツマタ
神祖ミツマタ

三

いづか
まつ
まつ
まつ
まつ

生うき
生うき
生うき
生うき
生うき



花散里ハナチヨリ
花散里ハナチヨリ

香を

あつゝ

かとく

あそ秦後うらきの
宇治の中君の匂兵
船の宮ふしづる
てのめいがくあひだ
きとも罪をくらむ
お春林の妻殿の名
人の言ひ悪人の悪行
を画く小字アドア
ミハトウクミアホ
ーとアモヒテ豆六アシロクあ
勅旨懲惡あひする
おとは地御へ人の上
小善惡あひすと公
事をあそり何せま
且を春秋ホルビゼン
此地を作る時代の



幸万水一嘉平玄龍廟

朱雀村上氏三代小准
ぢうすりまこと桐壇

のみくじを六延喜朱雀
を六天慶。冷泉院を六天

暦小比一母り光源氏

の差を六延喜の臣子西

の官の毛大臣亨明公

小比もるうり周公且

東經臺坐相在納め

立あーを思ひ又光若
炭垂の女御寒通のみ

か在赤の羽林二条の后

小密通の儀相似る
小准もるうり

徐氏ハ朱雀堂令泉院

をと書ふ小准もるうり

て宇多の天皇より

詔そり六月ろ手り

のうちぬ祝かり

を一条院の在時の

さみをわくへきて

いひきそるうりと

思ふべー

此地後作者の幸

宇佐大納言相宿小

曰今ハむくー誠ちの
守も時とてすえ向

る世小さうーうり
なる人ハはがままで
をやうりばあ財跡
氏ハ作りふうりと



須磨

いせ

あすを

かす

すほの

浦



明石

あきの

秋の

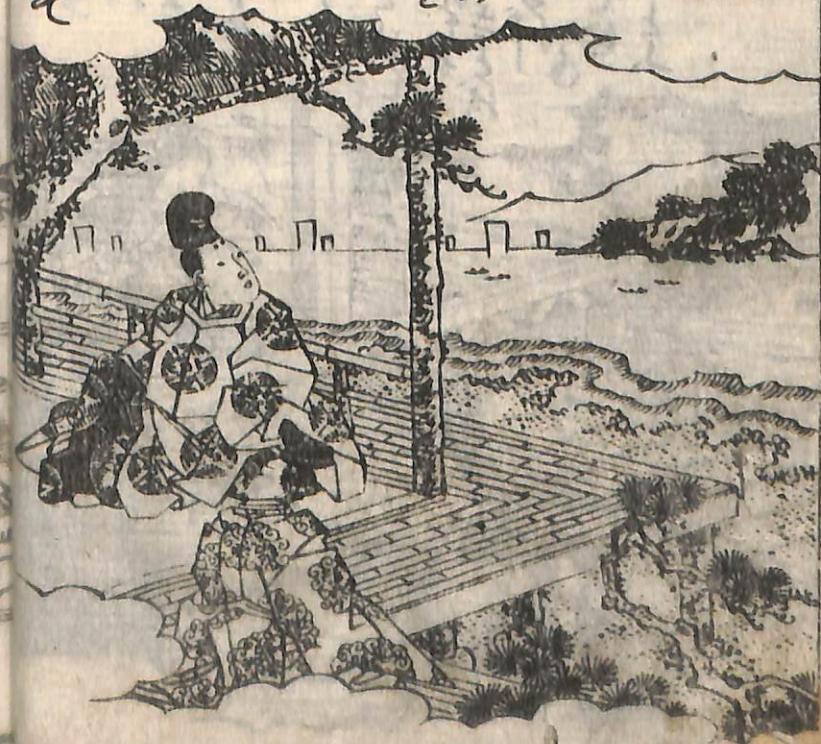
ねの

雪井を

うけい

生れの

すゑん





宣へて信へ

式物修理本

きくよるす河海

抄孟津抄

自筆の本

もととく今世葉

はくらべ源の光

引八木を以て授

合取捨へと家が

と毛りりや

二条帥ノ伊房本

冷泉中納言朝隆本

堀河左大臣俊房本

美表紙とひ

左大臣の筆跡

後三位栗子本

土御門右大臣女

京極北政刑

法藏寺圓白本

尚侍版本とひ

三条三位俊成本

東極中納言定家本

青表紙とひ

おのへ院本とひ

とも寄異回あり

古写本をうんぐ合

せく且子見を加ふ

あまふほふ古今の

美言うり

河内本ハ河内のす

關風

あふ

さうの

せきや

いわゆ

せきや

いわゆ

せきや

いわゆ

中を

まことん

の

の

繪合

うきあ

その

をう

けく

まき

ゑみ

わづ

ねむ

ふ



大監物語の光

ハの本を以て授合

取扱へと家の本

とせりとて河内

本とよす

船巴抄ふきばりの

ぎりふ本の見是

あり宣家の御自

筆の青表紙中

頃どんぜうのやう

うりふる河内

の守光抄源氏物

語をとりうきのそ

あそぶますすま

河内本とせふらひ

耕玄老人河内本

をほじてかねご

きやくをうかま

萬雲

いづひまく

三種小

なあい

うすき

ものわ

袖引

りうや

ゆふ

松風

まき

船を

えく

海

さとふ

にふる

浦川

さとふ

浦

を

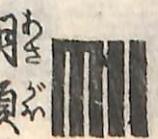
宗祇宣家の清
本をやうく興
とく志多良とい
ひ人ふあひや
きと青表紙傳
受こそのもれい
がくことどうを
一条岸閣の御本
くらまゆく二条西
とりとも禁中の



院庵へとすくやさ
きすとあり

え

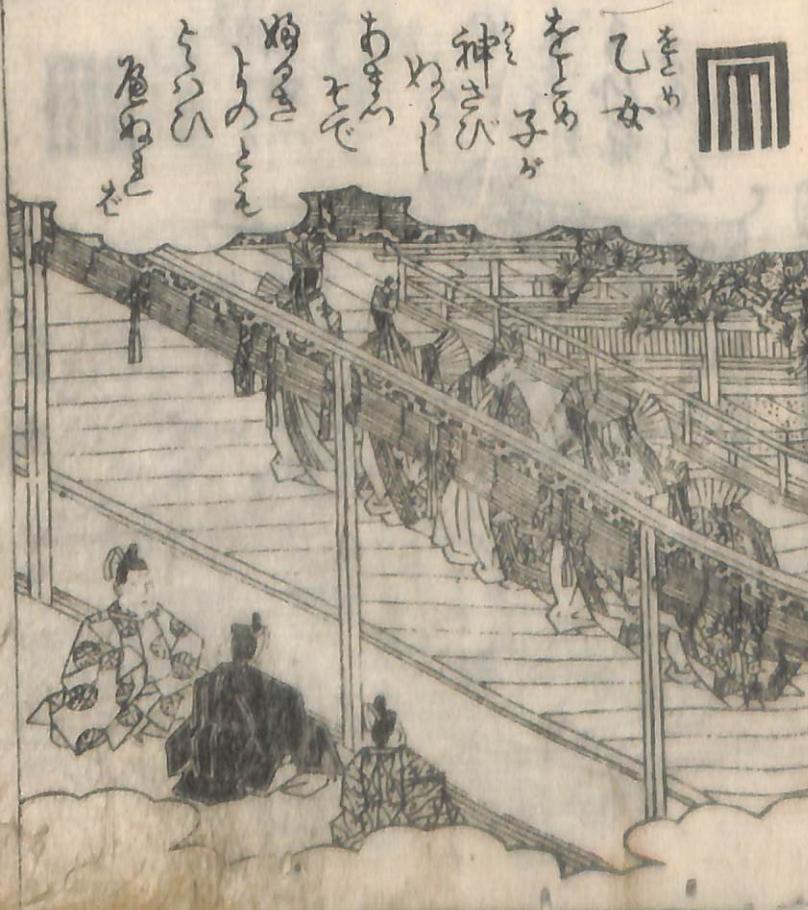
朝顔



韓抄ふと家極
中納言定家の
本青表紙と序文
宗祇用ひて今小
そも一華堂來
阿云定家の青表
紙を因防の圖の
守ゆく一覽せり
外題ハ青表紙小
宣家のうちつけ
がきうり西四代後
上印門の完

をりの
けい
こまど
まくら
ねぐわの
まくろ
けいり
もをく
しゆく
らん

手てげよのをすん
中少が一筆より
今母小源氏の外
題をまん中少が
事ハこまを例と
せり定家の自筆
相壇花の宴携版
の三冊之余ハ後成
のむをあらうどの
筆と水尾づくの
巻うせて弓を逍遙
院庵へとすくやさ
きすとあり



うといへ近代の
先達の青表紙

をのちひらきあり

よりておもを考る

ふ今ハ二本の差別

ナリ太きと今世ト

併くは青表紙のそ

と不思議り予比

りのさうをとく

ほもふよとさう

こうよくまを

冬考へて家との

花がおどをす

こりよくまを

あまつえくわい

是ハ河内本こそ

青表紙と金篇

うちせうのたが

ひへあま下すすけ

大抵先達の青表

紙とりて手うりを

中ハ河内本とある

からよりする所の

あるもあま下す

金篇ハ青うべき

バ河内本ハ多く葉

えせどとうえす

比事絵さすゆうだ

くかきこまふつ死

てうづくすまた

小河内本をえ

る人もナリ近き

王尊おうそん

無む

家いえ

永えい

を主をしゅ

かまとかまつ

正まさ

五ご

七しち

九く

十七じゅうしち

生てうすは三ぞの
うちせうのたが
ひへあま下すすけ

大抵先達の青表

紙とりて手うりを

中ハ河内本とある

からよりする所の

あるもあま下す

金篇ハ青うべき

バ河内本ハ多く葉

えせどとうえす

比事絵さすゆうだ

くかきこまふつ死

てうづくすまた

小河内本をえ

る人もナリ近き



世の抄小可けく
りくと古抄小あくろ

を引くりと今元
かよぶとらまが

ふもあと青表紙小
もあとよを用ひ

あき毛のぞれそ
るべきとくそく

うなりのうり今の
世小竹のとあらハ

いづもは写のあや
まううさびのち

ぎひ脱落落等く
一とさと一とさと

不吉き小けりのや

すとあ世の先達
をつゝてゆくを

あそぶとて貴重他
書ふことあるやあ小

法がよの小あ事り
をきくとて若本

事一きいひに式
教が四壁をのこして

そのひとをじき、
ざるやあぐべー

よりこべー
更科の犯小云あ孫
まちあどきの

人のものごとく見詠
うのりのごとく見詠

朝蝶



花ぞの春

あくふを

さくや

株主の

む

うとく

スミル

三小

蝶

おぐハ

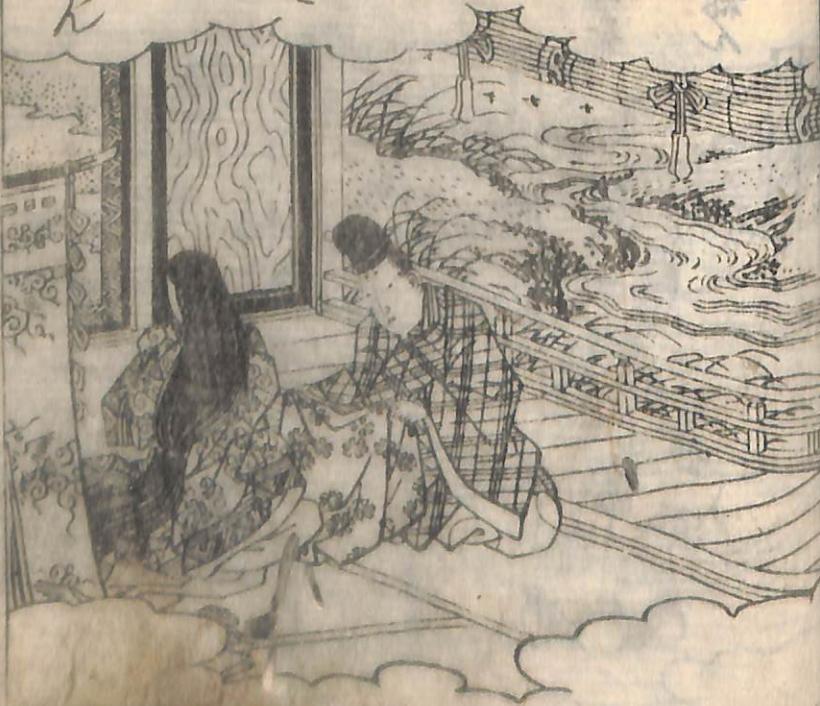
せで

おとく

こそ

まくす

うくん





䷗ 豊





మాను కు
ప్రాతిస్థానికంగా
అనుభవించుని
స్వరూపించుని
హిన్దులో
శాఖలు వ్యాపి
కు—శాఖలు
స్వామీ గు
ప్రాతిస్థాని
ప్రాతిస్థాని
ప్రాతిస్థాని
ప్రాతిస్థాని
ప్రాతిస్థాని



ఇంద్రానికండ
మాను కు
ప్రాతిస్థానికంగా
అనుభవించుని
స్వరూపించుని
హిన్దులో
శాఖలు వ్యాపి
కు—శాఖలు
స్వామీ గు
ప్రాతిస్థాని
ప్రాతిస్థాని
ప్రాతిస్థాని
ప్రాతిస్థాని
ప్రాతిస్థాని

右被衣小源氏をも

けふ為時の代とて
ひけう母のつゝま

ものあまよもさう
もとよほりの

ぐすらはりの
あとふくに引用

あるう
僻素抄虫被衣の

徳者大節の三位小
あいぞとりう

接もるふばねぐり
称美の事頃德院

御紀を花を詠情
ふもとより

又中山内麻の水境

か云ふ是式記源氏
物やつくり半て

竹久はきく小丸失
の本好とおちやえ

ぞ日が紀をもと
あきくらめかきとく

日記ふりうるまく
あきくらめかきとく

えよりとて時の人
日本紀の局と号し
竹久くるらむ

時長明が経名抄
か云ふもばきの
ぐうつくりしてす
争と黒(くろ)比
世もとうあくもあう



上蘭

もすの

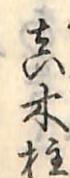
はゆる

あまくは

あまくは

あまくは

あまくは



かきよ

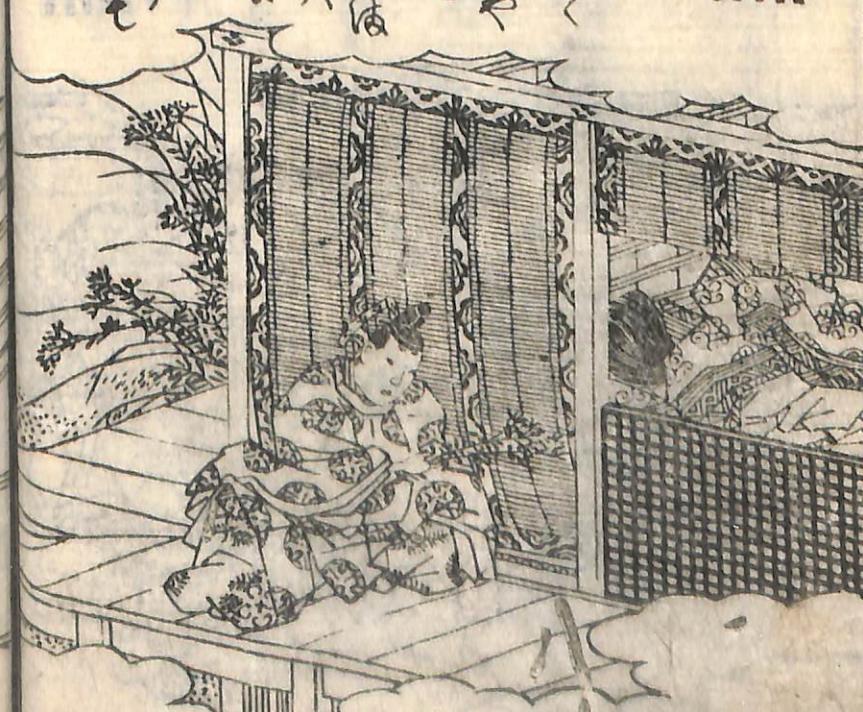
かきよ

かきよ

かきよ

かきよ

かきよ



らうふかやせとま
とふかやせとま

さるあす／あやとま
おがゆとまとま

のりのざく／あがゆ
いとをうりねぎ

のりのざく／あがゆ
くそつづんあ

源氏／ふきま／さん
みをほそりかん

あらんやう／不く
とりをと／う／う／

をね裡／とく／えり
こちあは／さ／う／

せりの／せん／れ
あらん／と／う／

東鑑四十三小云建
長六年十二月十八日

丙戌於御所光源
氏物候事有御證

儀何内す親行流之
ち

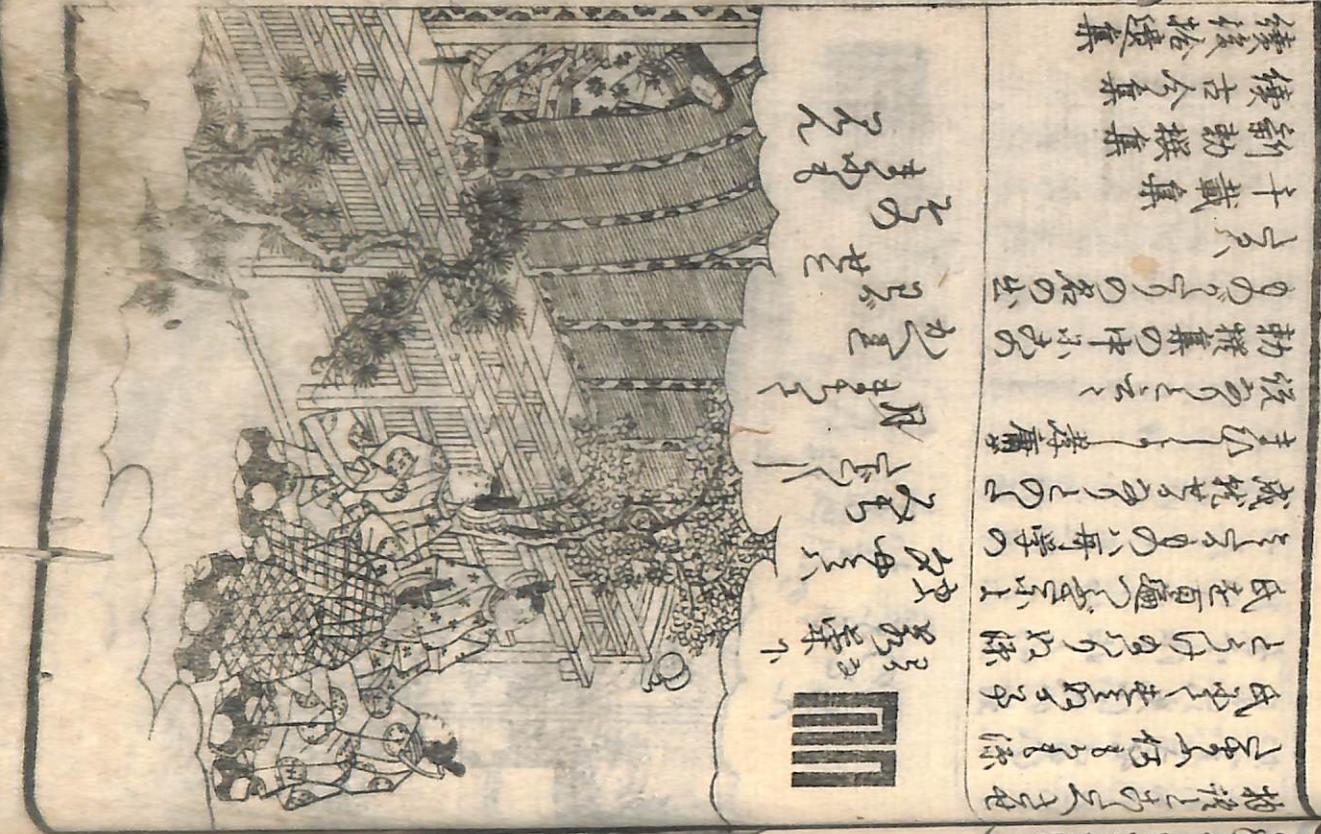
鳥丸光椎おとひら みつし

葛裏紫くずの うらむら



鳥丸光椎おとひら みつし
氏物候事有御證ごじぶつ こうじ ごう
儀何内す親行流之きいなむだす しんぎゆう
さく／＼中の院の源
氏の津次つぐの時鳥丸
どくわせらま／
源氏げんじハ生べて哥の
往あらわりとほあわ





左の撰集等之
捨蘇が小源氏の
ぐうの目序等之
ゆり明石の次小浦
竹小東等の次小狭
席等の巻ありと
今のからくは其卷
今十四店のうち橋船
の巻から其の序
橋のせ続いするを
をすばす非とひふ
こまく先源氏の君
かまくまくまく
のうやかのうや



柏木

柏木

柏木

柏木

柏木

柏木



柏木

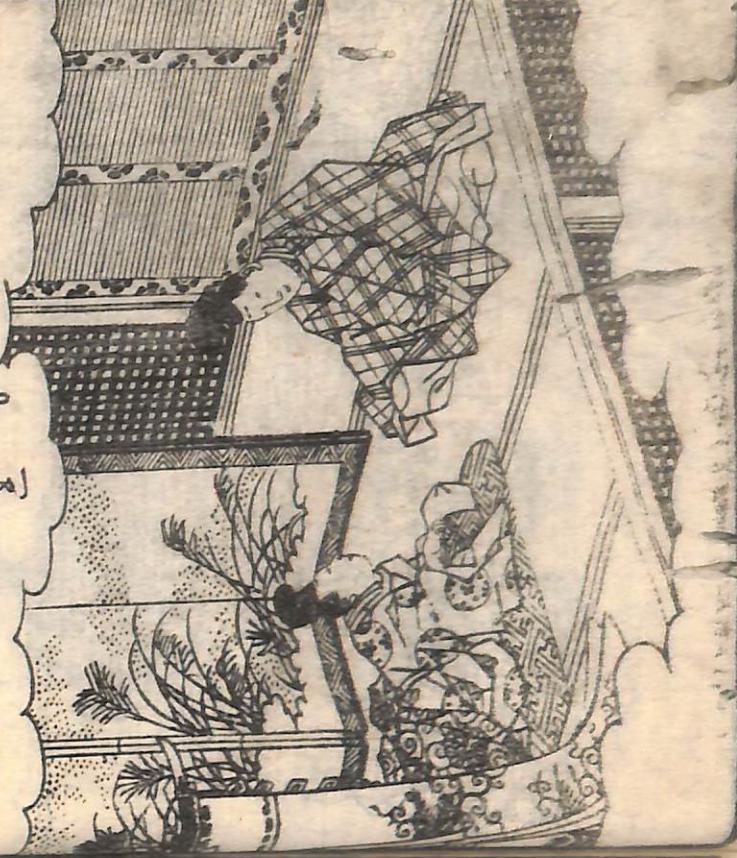
柏木

柏木

柏木

柏木

柏木



木本等のいの道
の源氏小説等
まくあまを書
けり更科日記小説
が年後記と云う
今後布ちぢみを
腹浦竹席等の
二三作も巻うるの
れまく大数を書
て六十作といふを
を天台の六十巻が
准らくまきひが
柏木の中小天台教
がつひきひが



柏木

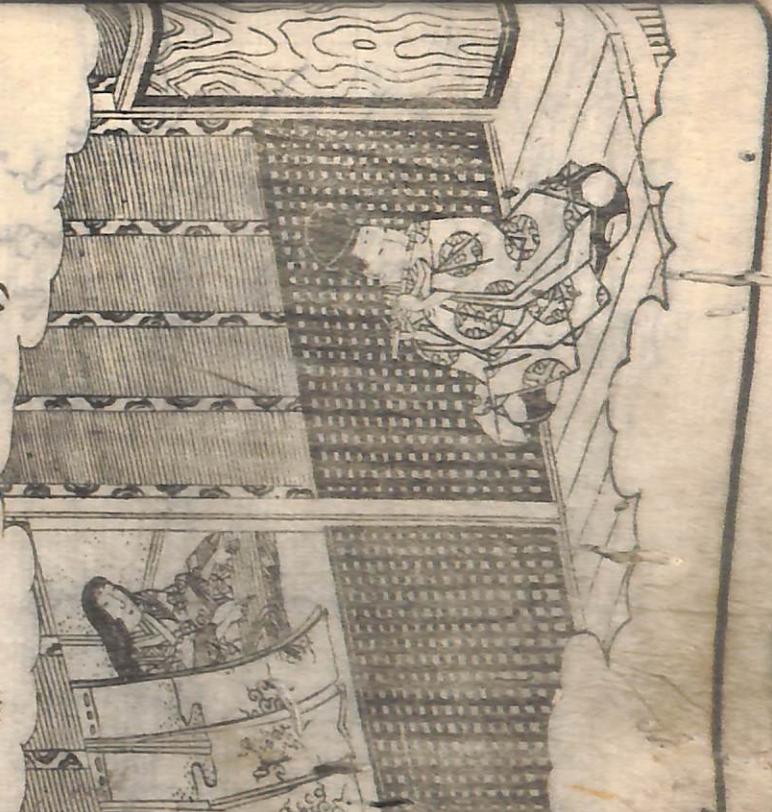
柏木

柏木

柏木

柏木

柏木



あるかトウリ人古家

ふうすうする人の

かくこしゆきのれ

源氏物語へもとてふ

将久のあらりをす

らふうせよます

將久のまほあ

らむようすの車

世の東ホカリや

けび上代の美風が

とあくそ俗ふうま

んみをすのふそめ

あらわ小づーき

まへ人こひそをち

づけをる金ぐる

けはせ世ふあまゆ

らばきへきうご

るすへかをよどむ

ことばせよとく人
いふかあまびとお
書きひくうらば又
ありてもうる人を
くまくまだるまかひ
とくにきもきても
おのせんうゑるを思
ひおののくちのく
を（がま）う筆法
をあらひきぞとお
父のたんじことふ
かくまうちふ
りかくの上萬の美
風公のちひをく



きゆ
珍出

まゆく
季の
やどうを

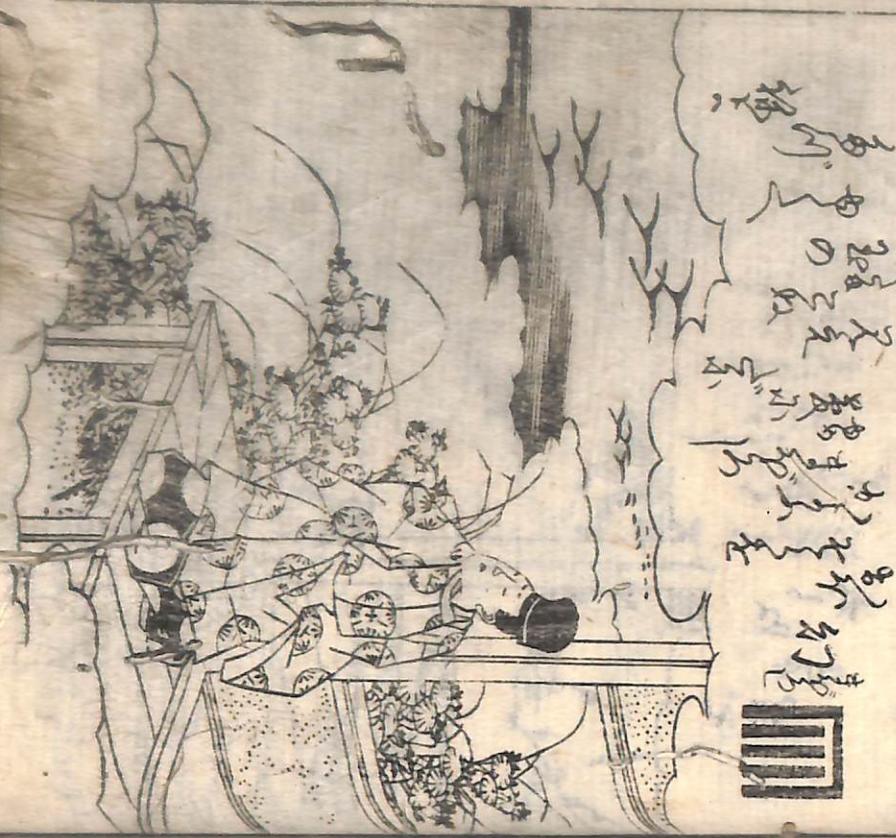
いと
とも
う成

まゆの
あまゆ

あまゆ
あまゆ

あまゆ
あまゆ

月夜



事ハ知とせばさく

一やの奥まふかを

つけまへ書中のよ

きみをのそるべ

一このよけをこむ

まへゆく好えの

手をかひのよひ

そん多くして益

もくす一夫日本

王道長久あるす

ハ礼樂文章をう

かちぎるをりつて

いのくの礼樂文

章をそろそろみ

めのぞのふのこ

小はものぞのく

あいとお一小公を

ほくまへ上代の英

風うりれのたゞ

くくとゆくやうく

の和一とやうく

ての男女とす小上

萬らーーつゆ小
難樂をひてあひび
りゆーくねどろ
うちひうり次子

まの

うぶひそ

あるひ

あゆき

あゆき

白宮

おひづ

たまふ

とへまつ

いふ

おゆも

はとも

きぬ

きよ

きよ

きよ

紅梅

かうめ

あひ

ふわひ

あひ

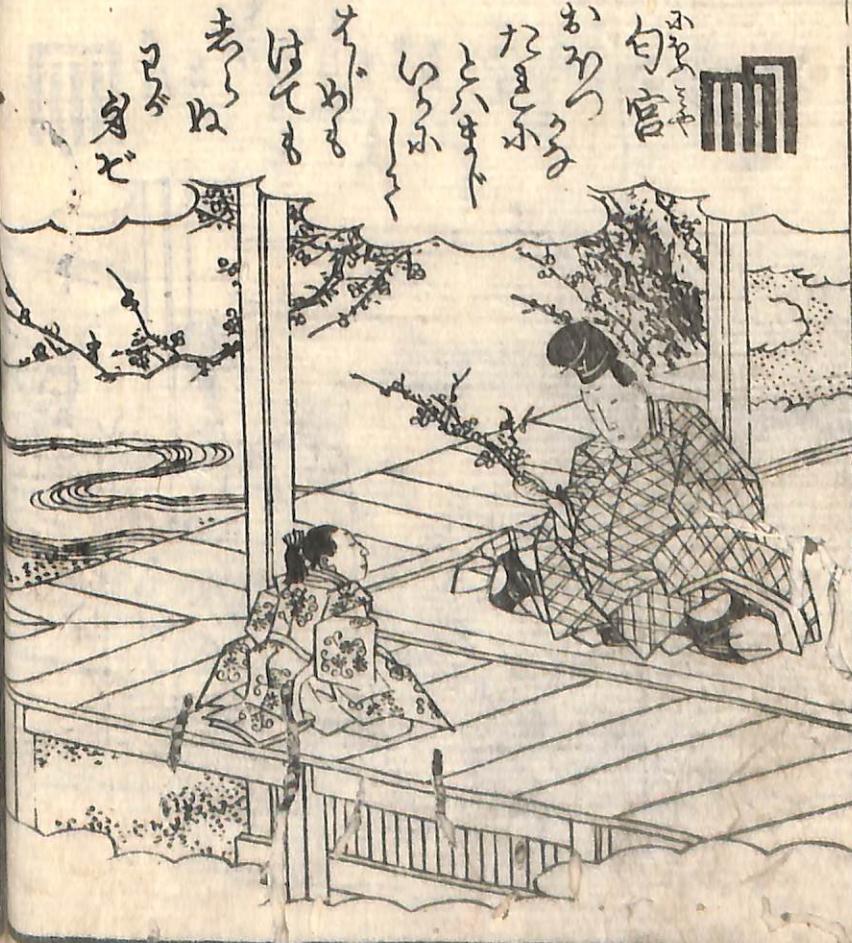
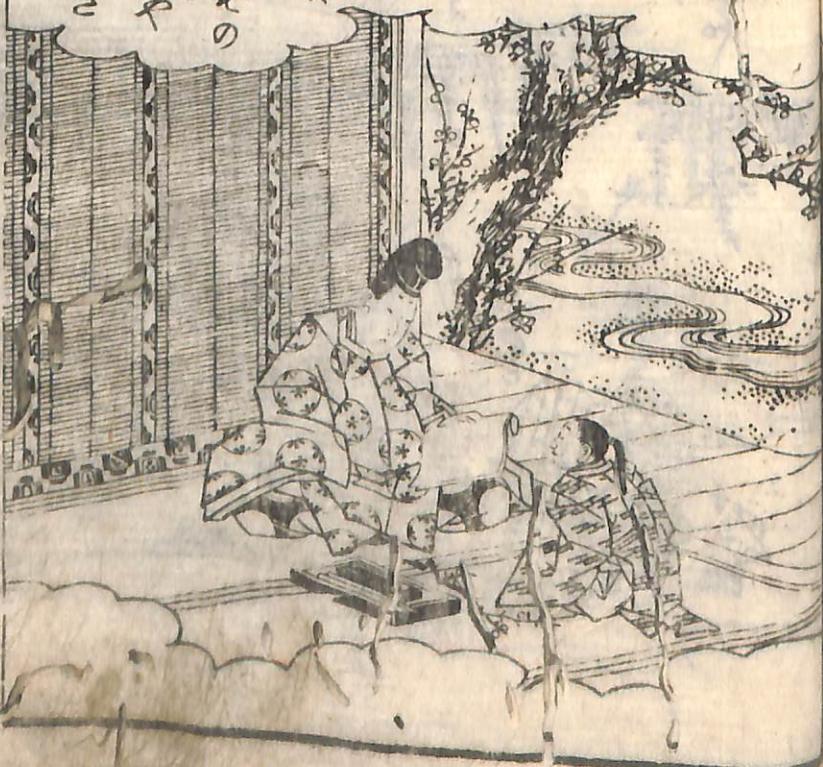
まの

うぶひそ

あるひ

あゆき

あゆき



化をうへきふち

多くとまふより

て、國もまつゞぞ

富もまことのぶ

おきるよとせば

おぎりふすは

のすふすせく人

情をつゝあじ

り且たせひのうり

やくさゑをとくあ

せり哥をとくあ

ことぶのをゑまで

もとまく人のの

氣をとけを出

をうごとくまつて

ともめうりまで

比のうりへ風

化をとくあくか

けり中やもまえ

のまをくわく

あゆり奈竹の

あそびハ君子の

さうりくさんげん

のあそびをとく

さまと上蕩の風

俗をまくがんが

うふあくまの

ゆのせうひを

んと人ののめ

竹川



好色の事をつ

いとふりあま

神く世の人間で

あそびあらひ君

のひうみん時

まきのひーと

さんのかうぎー

なりさきだばすの

だりうみーいそ

う上也王者の選風

をあそびあらんや

このやあふ須磨院

も比拝だうを

日本ノ至宝と事

一かづりあうふ

みの跡をよれ樂

のまち小よ前路

ざる中人以下の人

ハそのあいを

あづくばまき

ひうわる君

ひのあくふ

河内守親行

淡小素寂法師

とひ

久明觀玉より餘

氏の往を出であ

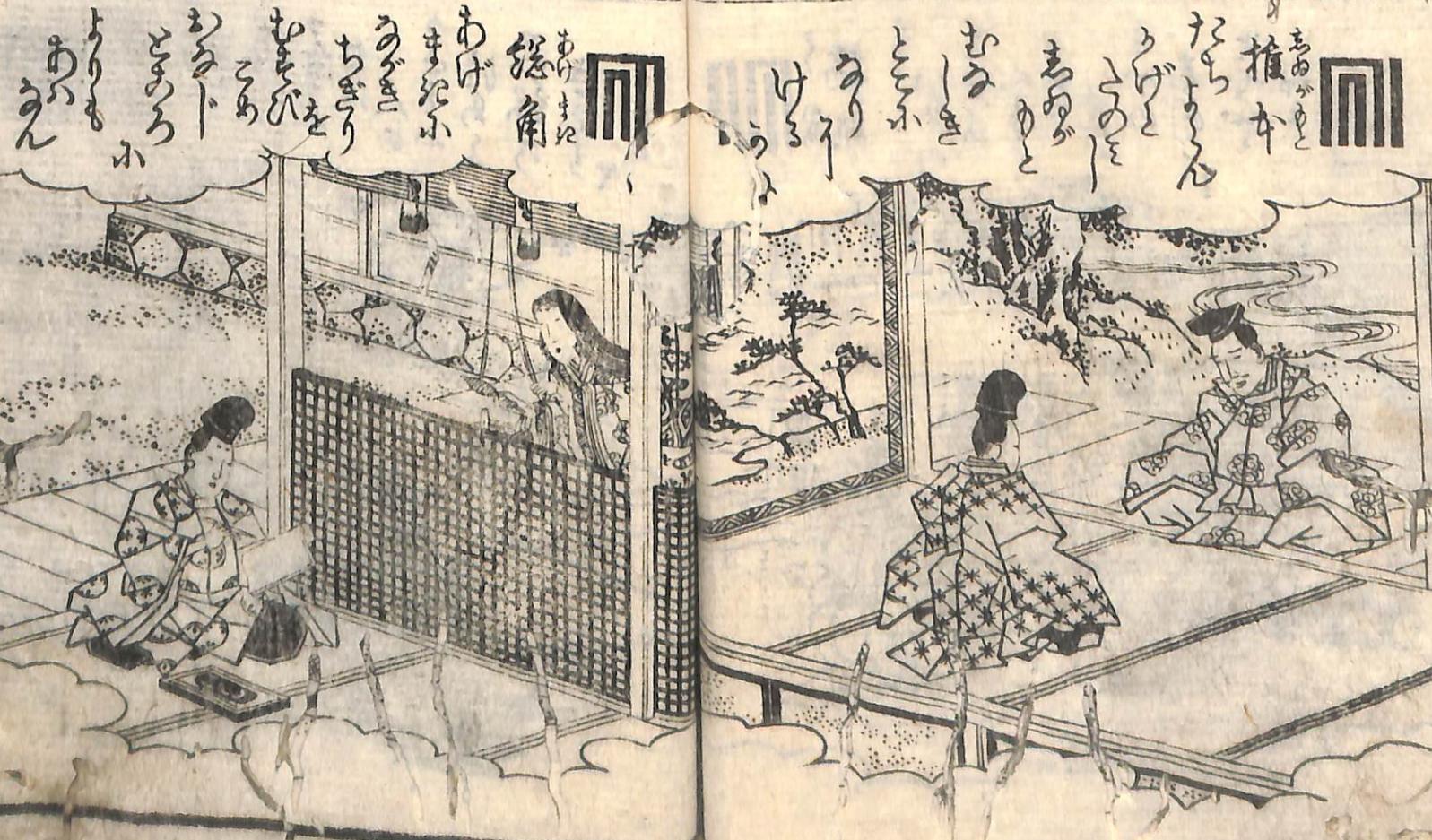
げよとあそびだり

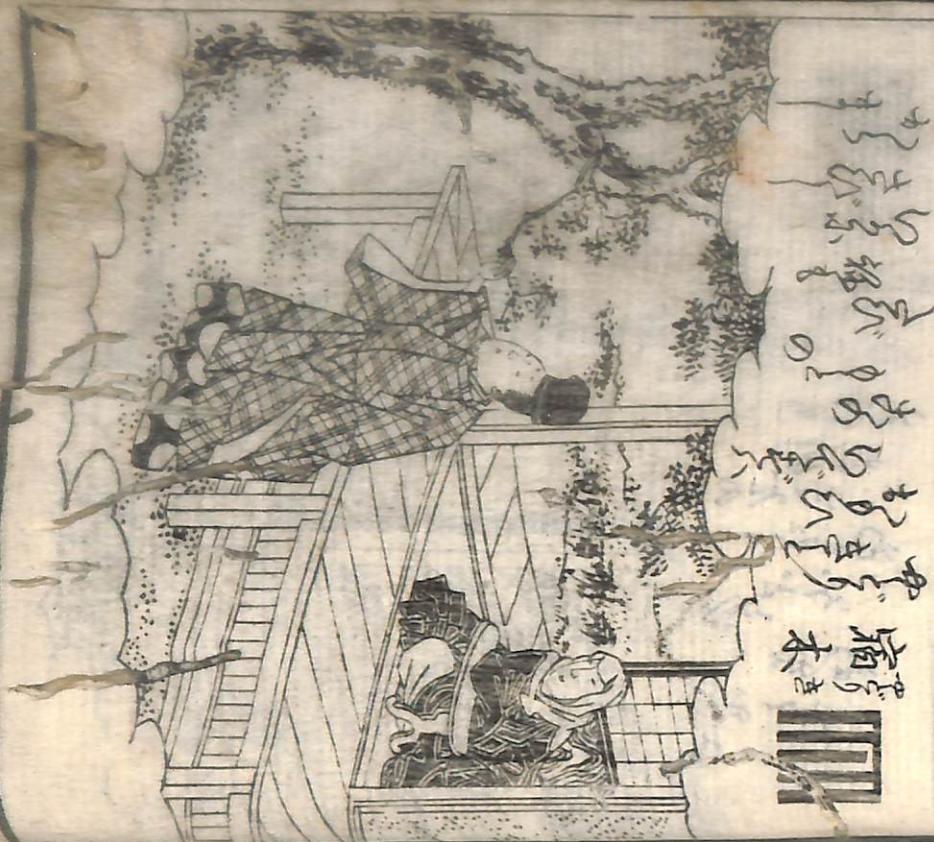
けよば紫明抄十

二巻をあすく

ひうわる君

高
權





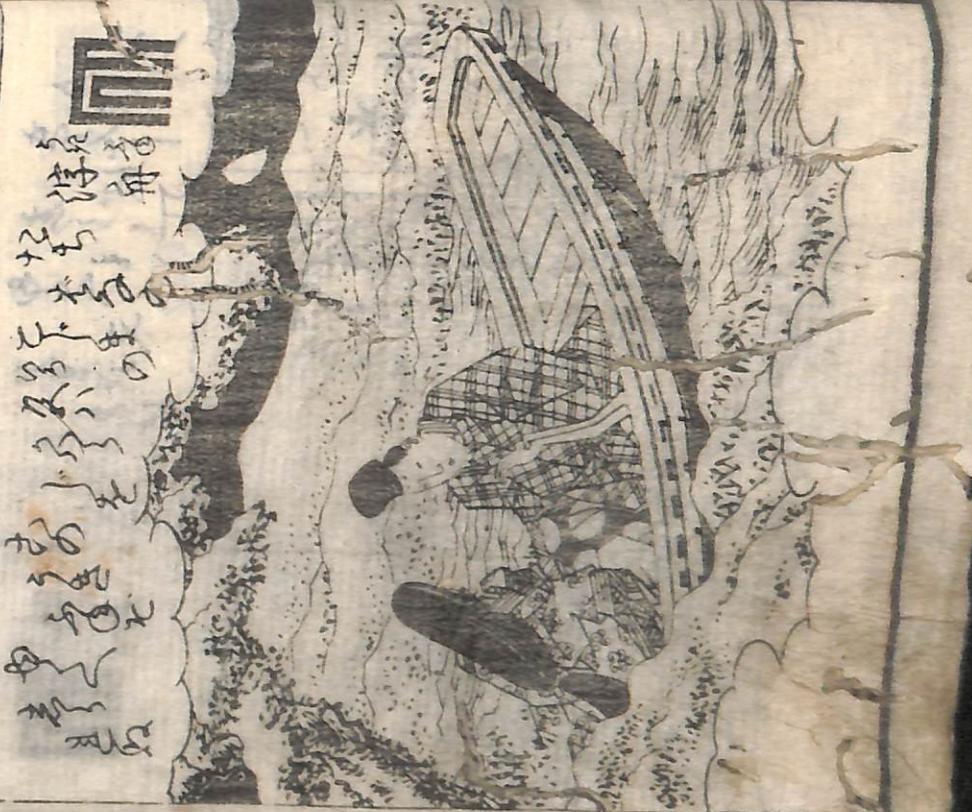
水宿



卷之三

鳥 章
歌 うた
歌 うた

資 級
筆 ひらふ
筆 ひらふ



重基

教の本

名を本

の本

の本

師阿

の本

本

和歌上

和歌

傳

家宗

法の本

本

の本

の本

人

人

人

人

人

特體

本

本

本

本

本

本

本

本

本



の本

の本



。仙源お小遣され
彼の怒えで正相ど
りをいちはお母け
て次めよと跋水
かみづひの車を
あまきまとまるまふ

明魏

山水のちの
まうすを
まよひを
すの
ゆきを
みる
ぎりけ



忠臣
貞婦

伊呂波文庫

五編

柳艸亭種々作

黄金水大盡盞

十一編

爲永春水作

假名
反古
一休

十三編
十四編

柳下草種昌作

十五編
勇齋國芳画

地本錦繪

咲紙同屋

甘泉堂

和泉屋市右衛門

